人の輪に入るのは苦手なので、自分で団体をつくりました

平石　真司さん

毎年着実に活動の幅を広げている日本の竹ファンクラブ。その代表として大活躍の平石さんですが、自称「元は引っ込み思案の会社人間」で、活動にたどりつくまで長い時間がかかったそうです。

このままいったら、ぬれ落ち葉

1990 年代、「ぬれ落ち葉」という言葉が流行し、定年退職後の男性のあり方が話題になっていました。団塊の世代の大量定年を前に、会社員は会社と家庭の往復だけでなく、もう一つの居場所をつくるべきだと言われ始めましたが、振り返ってみると自分も全くの会社人間であることに気付きました。もともと社交的な方ではないので、会社の仕事は一生懸命やっていたけれど、自宅のまわりには知り合いすらいない。毎日会社に通っているけれど、まわりの風景を見ているわけではない。これでは定年になったら自分も「ぬれ落ち葉」だ、と反省して、会社以外で仲間をつくり、社会とつながるきっかけをつくろうと考えました。

里山保全にたどりつくまでの長い道のり

何をしようかと考えたときに、最初に浮かんだのが「絵」でした。小学生の時に絵画コンクールで金賞をとったことがあり、絵だったら趣味にもなるし、仲間を増やせると思い、早速近くのカルチャーセンターの絵画コースに通うことにしました。
しかしカルチャーセンターでは、お友達の輪ががっちりとできあがっていて、気軽にその中に入れる雰囲気ではなく、とても居心地が悪い思いをしました。これじゃ仲間づくりはできないと思って、そこはすぐやめました。

文化的なお集まりよりも、体を鍛えれば仲間が増えるかもしれないと思い、次は水泳教室に通いました。ところが水泳教室では「今日は 2000 メートル泳ぎます！」「私は 3000 メートル！」と、黙々と泳ぐ人ばかりで、誰も声をかけてくれず、やっぱりすぐ辞めました。

今度はバードウォッチングならどうかと思い、観察会にも参加してみました。ところが、観察会が終わったら「今日の感想文を書いてください」と講師が言って参加者

を指名する。感想文は大嫌いだし、みんなの前でそれを読むなんてさらにとんでもない。自分が指名されたらどうしようかとずっと下を向いていました。幸い指名されなかったけれど、「二度と来るもんか」と思いました。

そんなこんなで、自分探しをしていましたが、ある時自然保護協会の自然観察指導員の講習に行く機会があり、これは自分に向いているかもしれないと思いました。もともと調べものは好きだし、港北ニュータウンに引っ越してきて、ほとんど手つかずの自然が残っているのにも感動していたからです。当時、健康のために始めたウォーキングをしているときに、冬枯れだった場所が見事な春景色になるというように、季節によって自然が変化していくことに気が付き始めました。

そう思って風景を見ると、いろんなものが目に付くようになりました。ある時ウォーキングをしていて、とてもきれいな黄色い花を見つけました。調べてみるとそれは「キンラン」で、港北ニュータウンには結構咲いていました。また、それ以外にも色んな花があることに気付き、自然観察指導員の講習で、調査方法を学んだこともあり、港北ニュータウンの自然を自分で調べ始めました。何かをやり出すと夢中になる性格で、早起きして出社の前に必ず調査をするようになり、ニュータウン中の自然観察マップをつくりました。

烏山公園から日本の竹ファンクラブへ

＜小机城址　竹灯籠のチップ化＞

その活動を通じて気づいたのは、「自然には手入れをしないと絶滅する植物がある」、ということです。自宅のすぐそばにある烏山公園はとても自然豊かな公園ですが、竹が繁茂し、明らかに荒れていました。何とかできないかと思いましたが、勝手に公園を手入れするわけにはいきません。そこで、市役所などに相談したところ、愛護会をつくれば公園の管理ができることがわかり、地域の住民に呼び掛けて「烏山公園愛護会」をつくりました。

＜竹の学校竹林管理コース　冬の施肥＞

烏山という小さな山一つを公園にした烏山公園は、手入れを始めたころ、山頂まで竹に覆われていました。だから竹林かと思っていたら、もともとは雑木林だったことがわかり、雑木林復元をめざして竹の伐採に取り組みました。最初は竹をなくせば、貴重な植物が復活すると考えて、竹をバンバン伐採していましたが、手入れをするうちに、竹が悪いのではなく、きちんと手入れをすれば、貴重な植物と竹は共存できることが分かってきました。

竹は人間が手入れをすれば、筍もとれるし、きれいな景観も提供してくれます。しかし、放置するととたんに獰猛になる。人間と竹はこれまでも共存してきたわけだし、竹の特性を理解して付き合えば、竹は十分役に立つのです。しかし、竹林が放置されてしまって、こうした付き合い方のノウハウが失われつつあります。これは烏山だけ

の問題ではないのだから、竹の付き合い方についてノウハウを蓄積し、日本の竹林について取り組む必要があると考え、1999 年「日本の竹ファンクラブ」をつくりました。

人の輪に入るより、自分で輪をつくる

鳥山公園愛護会のときは、近隣の住民に呼び掛けて仲間を募りましたが、「日本の竹ファンクラブ」は当時講師をしていたボランティア養成講座の竹林コースの受講者に呼び掛けたところ、20 人位が会員になってくれたことで、無事発足できました。その後も毎年 2・30 人の新規会員が入会しています。

「港北ニュータウンみどりの会」への入会は、最初からなら仲間にも参加しやすいだろうと思いきって設立総会に行きましたが、それ以外では絵や水泳で失敗しているので、既存の団体に入ったことはありません。これはもともと人見知りで、すでに人間関係が出来ているところに入るのが得意ではない、ということもあります。だから、他のグループに入るよりは自分で創った方が良いと思って、自分で団体をつくってきました。

しかし、活動しているうちに、引っ込み思案ではなくなってしまいました。最近は、よく人前でも話すし、人を勧誘するのもうまくなったから、「どこが人見知り？」と呆れられることもあります。

人を誘い、定着してもらうコツ

活動してみたいと思っている人は、ちょっと肩を押すと参加してくれます。竹林の手入れは奥が深いので、一度入ってしまうと夢中になる人もたくさんいます。問題はその先で、続けるにはその活動にその人の居場所をつくらなければならない。竹伐りが好きな人、料理が好きな人、手仕事が好きな人、調査が好きな人など、人には得意分野があるので、それぞれの居場所をつくるようにしています。仕事が忙しくて活動になかなか参加出来ない人には、在宅でできる事をしてもらう形で居場所をつくります。居場所があれば、楽しく長く活動ができます。

＜こどもの国 竹灯籠製作＞

＜愛川町 チッパー処理＞

継続には家族の理解は重要なので、できるだけ夫婦単位での参加をすすめています。
実際に、ご夫婦で参加してくれる人も多く、会員の中で結婚した人もいます。また、アルコールの力も重要で活動後はバーベキューをして交流を深める、という楽しさも長く続けるには必要なことだと思っています。

人が関わって自然も町も元気になるのを見るのが一番うれしい

「日本の竹ファンクラブ」の目標は、荒廃竹林を間伐して手入れされた竹林にすることと、地域のコミュニティをつくることです。そのために、竹灯籠祭りのような参加型のイベントや事業を行い、結果として循環型社会ができる、というのが最終目的です。
年々竹灯籠祭りを地域活性化の手段として取り入れる自治体も増えていて、「日本の竹ファンクラブ」は大忙しです。
竹灯籠祭りは、まず竹を切る人が必要で、それを灯籠にする人、緑地を整備する人、緑地に灯籠を置く人、工作をする人、イベントでは灯籠に点火する人、人の波を整理する人、販売をする人、整備する人など、多くの役割が必要になります。それは多くの人が役割をもてることであり、それによって活動には多くの人の居場所ができる。
その結果、街が元気になる、という良い循環が出来つつあります。
多くの人の力で竹林や地域を変えていく。それによって自然が元気になって、人も町も元気になることが目に見えます。そうしたいろいろなものが変わっていくのを見るのが、一番うれしい時です。
「日本の竹ファンクラブ」も設立して 10 年を超え、ちょっと高齢化のきらいはありますが、若手もたくさん入会してきているので、あまり心配はしていません。自分のように「定年後どうしよう」という自分探しをしている方には、ぜひ参加をおすすめします。
あなたの居場所をつくって、お待ちしています。

編集後記

どうやってボランティア活動にたどり着いたかの、変遷のプロセスは聞きごたえがありました。ボランティアは一日にしてならず、です。この変遷のプロセスを聞くと、今、迷っている人もきっと「最初の一歩」を踏み出せることだろうと思います。

◆団体概要

日本の竹ファンクラブ　http://takefan.jp/

美しい日本の竹と文化を守るために、市民による竹林の保全と活用を普及、実践する活動を展開している。